

# かなざわ 12月号

令和元年11月30日

横浜市立金沢小学校

金沢区町屋町26-26

☎781-2401

## 経験することの意味



副校長 鈴木 和枝

先日6年生の子どもたちが家庭科の学習に取り組んでいる姿を観る機会に恵まれました。卒業を3ヶ月後に控えた今、相手のことを思い、自分がこれまでの学習で身に付けてきた力を活かし、素材や調理法を選び、一食分の献立を考え調理する、その一連の流れにこれまで自分の成長を見守り支え続けてくれているおうちの方への感謝の気持ちを込める…6年生ならではの学習単元です。私が参観した時間は、子どもたちは実際に献立を考えているところでした。教科書に掲載されている料理の写真や黒板に記されている友達の工夫を参考にしながら、最終的にどんな一食にするかを考えているその横顔は真剣そのものでした。

小学校時代の私は、毎日暗くなるまで友達と遊ぶことに夢中で、家の仕事を手伝う習慣もなく、高学年になっても料理、洗濯はもちろん使った物の片付けも親にやってもらう生活をしていたように思います。物作りは嫌いではなかったのですが、それは単に自分が好きであったというだけのことで、家族のために何かをする、家族の一員としての役割を果たすという意識はまるでありませんでした。ほんとうに幼かったのだと思います。そんな自分が「家族に作って食べさせたい!」と強く思ったのが、5年生の家庭科でその作り方を学んだ「フレンチドレッシング」でした。生野菜を食べるときは「マヨネーズ」という日常を過ごしていた子どもの自分にとって、一定の割合の量のサラダ油と酢、そして少々の塩、コショウをしっかりと混ぜ合わせることによって、作ることができるドレッシングの爽やかな酸味に、感動すら覚えたことを記憶しています。キュウリをスライスし、作ったドレッシングをかけ、冷蔵庫で冷やす…家庭科で一番最初に経験した調理実習だったと記憶しています。

それからは、毎日のように夕方台所に立ち(かなり母の邪魔だったと思うのですが)、フレンチドレッシングを作り続けました。家族は(特に母は)、毎日変わり映えのしない同じドレッシングの味を「美味しい」「美味しい」と言って食べてくれました。今でもフレンチドレッシングを作るたびに、あのときの気持ちや家族で夕食を食べているときの風景、部屋の中を照らす明かりの色を思い出します。そして今、少々の調理が好きな自分がいます。

先日、PTA主催の「金小セミナー」が催されたのですが、その際にお話いただいた講師の先生からはほんとうにたくさんのお話をいただきました。講演の中のどの部分を切り取っても、貴重なお話ばかりだったのですが、中でも大変心に残ったのは、子どもは「経験」をすることで使う「言葉」が意味をもった「生きた言葉」となり、語彙力が高まりコミュニケーションや生活が変化するというお話でした。例として、「川下」と「川上」という二つの言葉を実感を伴って理解していく2年生の子どもたちの姿とお父さんの関わりをお話されました。お父さんが子どもに、二人で実際に川に行ったときに見た川の様子を思い出させながら、「あのときに見たあの川の様子が川上だよ」「そして、もっとこっちの方に来ると景色が変わってくるでしょ。あそこが川下って言うんだよ」と、子どもと生活経験の中で共有した風景を基に説明をしたそうです。すると、「川上」「川下」という少々難しい言葉を、実感を伴って子どもが理解をしたとのことでした。「経験」したことが、「そうか、そうなんだ…」と自分の中に根付く、落ちる…この感覚は、人が生きる過程の中でたくさん感じるものだと思います。そして、そういった過程、大げさかもしれませんが「人生」を豊かにする基は、小さい頃の経験の数々なのだと思います。これからも学校は、ご家庭と共に子どもたちの毎日の経験を大切にしたいです。

最近はずいぶん寒い日が続くようにもなりました。最後になりましたが、今年も支えていただき、ほんとうにありがとうございました。どうぞお健やかに新しい年をお迎えください。